

法門寺地宮出土の真身宝函に表される八大明王について

An iconographical study of Eight myō'ō which carved on the gold casket,
discovered from the dagoba underground palace in the Famen Temple.

見田 隆鑑 (MITA Takaaki)

名古屋大学文学研究科博士後期課程
Doctrinal Course, Graduate School of Letters, Nagoya University

Abstract

This paper discusses an iconographical study of “Eight myō'ō” which carved on the gold casket, discovered from the dagoba underground palace in the Famen Temple, China.

Total 45 characters of Esoteric Buddhism carved on this casket. And from foregoing study, Wulim, Hanjinke, 『A Study of Tang-period Mikkyō-Maṇḍala which found from the dagoba underground palace in Famen Temple』(『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』) 1998, these 45 characters were identified as 37 characters from Vajradhātu-maṇḍala and 4 god (Pṛthivī/Varuṇa/Agni/Vāyu) and 4 myō'ō (Acalanātha/Trailokyavijaya/Kuṇḍali/Vajrayakṣa). I agree to the opinion of “37 characters from Vajradhātu-maṇḍala” for the most part, but as for the other 8 characters I have another opinion. On this paper we reconsider about foregoing opinions and identify these 8 characters as a group of “Eight myō'ō” in comparison with descriptions of scriptures, pictures and sculptures which existent in China and Japan. And we examine about the iconography of “Eight myō'ō” and its distribution on Maṇḍala.

はじめに

法門寺は、中国・西安から西に約120キロ離れた陝西省扶風県法門鎮に位置し、創建は西魏時代に遡るであろうことが指摘されており(註1)、唐の時代には釈迦の舍利を安置する四大寺院の一つとして隆盛した。特に唐王朝の第十七代懿宗皇帝は仏教に厚く帰依し、『旧唐書』には咸通十二年〔871〕8月に九隴山の師益という禅僧が法門寺塔下で舍利を発見したという記録も残り、懿宗の時代に法門寺から都長安へ仏舎利を迎えるという行事が行われ、これに関係する遺品が現代に伝わるものと思われる。創建当初の真身宝塔の姿は不明だが、唐末期には四層の木塔であったとされ、明の隆慶年間〔1567～1572〕に倒壊し、十三層の磚築塔が建てられていたが、この塔は1981年8月21日に倒壊した。そして、1987年4月にこの塔の地下より宮殿とともに多数の遺品が発見された。

この法門寺真身宝塔の地下から出土した文物に関する写真資料の公開とその検討は『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』(呉立民・韓金科、1998)(註2)にて行われ、法門寺に残る唐末密教の図像に関し、主に日本に残る白描図像等との比較から尊名の比定及び全体の構成を検討された点で非常に意義深いものである。しかし、既に頼富本宏氏が同じく法門寺地宮より出土した捧真身菩薩〔871年銘〕の台座に表現される尊像や種子に関してより詳細な検討を加えられたように(註3)、尊名比定や構成に関しては再考の余地を残す部分もあると言える。本稿は、そのなかでも特に真身宝函に表される八大明王の図像に関して検討を加えるものである。この真身宝函は、1987年4月に発見された法門寺真身宝塔下の地下宮殿のうち、後室床下の秘龕より発見された縦横各17.5cm、高さ16.6cmの鍍金製の函であり、仏舎利(靈

骨)を包む四層からなる容器の三層目にあたる函である。この真身宝函の底面には「大唐咸通十二年十月十六日遺法弟子比丘智英敬造真身舍利寶函永為供養」との銘記があり、咸通十二年〔871〕に智英という比丘が関わったものであることが分かる。

咸通十二年という唐王朝はちょうど第十七代懿宗皇帝の時代で、日本は貞観十三年・清和天皇の時代にあたり、後入唐僧正宗叡〔809～884〕が貞観四年〔862〕に唐に渡り、貞観七年〔865〕に帰朝した六年後という時期にあたり、恵果〔746～805〕以降の法全〔生没年不詳〕ら唐末の密教僧と入唐僧との交流、当時の中国における唐末期の密教図像を考える上でも非常に興味深い時期にもあたる。この真身宝函の西面の阿弥陀如来及び四親近菩薩の面には「奉為皇帝敬造釋迦牟尼佛真身寶函」と鑿文があり、この真身宝函が法門寺における懿宗皇帝の仏舎利供養と関わる遺品である可能性を示している。

『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』では、真身宝函の四十五尊に関しては韓偉氏の「法門寺唐代金剛界大曼荼羅成身会造像宝函考釋」(1993)での解釈を受けていることが記されているが、真身宝函に表現される尊像に関して、特に日本に残る現図金剛界曼荼羅成身会と比較され、金剛界五仏(大日・阿_B・宝生・阿弥陀・不空成就)と四波羅蜜菩薩、四仏の各四親近菩薩(十六大菩薩)、内外の八供養菩薩、四摂菩薩、四大神(地神・水神・火神・風神)、四大明王(不動・降三世・軍荼利・大威徳)の計四十五尊に比定された。この内、四大神と四明王の八尊を除く成身会三十七尊に関しては、現図との細部の図像的な違いは認められるものの尊名及びその構成に関する見解に概ね異論はなく、本稿では残りの八尊に関してこれらが八大明王の一群であることを示すとともに、八大明王の図像や配置の問題に関して若干の検討を加えたいと思う。内容に関しては大方のご批判をいただければ幸いである。

1. 各尊像の尊名に関して

韓氏は恐らく現図金剛界曼荼羅成身会の構成で全体像を捉えようとされた為に、四大神をまず比定し残りの四尊を例えば天台系の金剛界八十一尊曼荼羅(例:降三世・大威徳・馬頭・軍荼利)や法華曼荼羅(不動・降三世・軍荼利・烏樞瑟摩)などのように、しばしば曼荼羅の四隅に配される四大明王(註4)にあてられたかと想像するが、八尊ともに尊名を確定する図像的な根拠が薄いように思われる。

まず、これら八尊の特徴は六面二臂二足の大威徳明王像を除き、その他は総て一面二臂二足の姿であり、みな岩座を台座とすることである。八大明王の像容を説く経典は、晩唐期の僧・達磨栖那(法将)訳の『大妙金剛甘露軍荼利焰鬘熾盛佛頂経』(以下『大妙金剛経』大正新脩大藏経19卷密教部二, No.965)が著名であり、この経典は慧運〔798～869〕によって日本に請来された〔847年〕と伝えられる。この他に細かな像容に関する記述はないものの金剛智〔671～741〕訳『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』(以下『瑜祇経』, 空海・慧運・宗叡請来 大正新脩大藏経第18卷密教部二, No.867)など八大明王が登場する経典は幾つか存在している。もちろん、個々の明王の像容を記す経典は多数存在するが、一明王群としての像容を記すものは中期密教系の経典では管見の及ぶ限り先の『大妙金剛経』のみである(註5)。また、八大明王に関しては『大妙金剛経』に説く八大菩薩からの変化身という説だけではなく、不動明王を除いて烏樞沙摩明王を加え八大明王とし、これを不動明王の眷属とする説や五大明王に烏樞沙摩明王・無能勝明王・馬頭明王の三尊を加え八大明王とする説も存在することが既に指摘されている(註6)。

中国での八大明王の現存作例は限られるが、本稿にて述べる真身宝函中の八大明王の他に、同じく法門寺地宮出土の捧真身菩薩〔871年〕台座の八大明王(尊名に関しては本稿では頼富氏の見解に従う)、劍川石窟石鐘寺明王堂〔南詔末大理初〕に見る触地印釈迦と阿難・迦葉の左右四尊ずつ配される八大明王(各尊名及びその方位を記す短冊あり)などの一群が確認されている。また、十大明王の中に含まれる八大明王については時代が下るが大足・宝頂山石刻〔宋代末〕や石家莊毘盧寺〔明代〕などの作例が知られている他、個々

の明王に関しては幾つかの作例が確認されており、敦煌莫高窟や安西榆林窟の壁画中には未だ尊名が確定できない唐代の明王像が多数残されている。

一方、日本では八大明王の現存作例は平安末期以降の作例ではあるが、仏眼曼荼羅、大仏頂曼荼羅など別尊曼荼羅中に表される姿の他には具体的な作例を見ず、承澄〔1205～1283〕『阿婆縛抄』巻第116不動本 形象異事に「江師云。白河院御本尊中不動御ワケヌ御テ髪ウルハシク下有之。唐院八大明王中其一也云々」(大正図像9, p314.a)と記述が残るように、円仁〔794～864〕請来の『八大明王図像』〔847年請来〕から造形化が行われた不動明王の一作例が存在したことを窺わせるが、実際の現存作例では確認されていない。しかし、保安元年〔1120〕の奥書を残す京都・醍醐寺所蔵の『八大明王図像』(宗実本の他に良慶本があるが本稿は宗実本を用いる)の他、大正新脩大蔵経図像部所収の京都・醍醐寺所蔵『四家鈔図像』(心覚撰)に描かれる八大明王図像(各明王に尊名及び順番が振られている)など八大明王を一群として描く貴重な図像資料は幸いにも幾つか残されている。

この内、細部の差は見られるものの真身宝函中の八大明王に関しては大威徳明王が六面二臂二足の姿であり、その他の尊像が一面二臂二足で表される点も合わせ、『四家鈔図像』及び佛眼曼荼羅(ただし京都・醍醐寺所蔵「仏眼等図像のうちの仏眼曼荼羅図」など不動明王と歩擲明王以外の六尊がみな多臂の姿で表されるものも存在する)など別尊曼荼羅中に見られる像容とも概ね符合し、多面多臂の姿となる馬頭明王・無能勝明王・大威徳明王以外は『八大明王図像』とも共通点が見られ、尊名比定が可能である。まず、『大妙金剛経』の記述や『四家鈔図像』、『八大明王図像』の姿との比較も加えながら各尊名を比定していきたいと思う。なお順序に関しては『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』での韓氏の検討順に合わせるものとし、〔 〕には韓氏の比定された尊名を記す。図版は真身宝函中の姿(a)、『四家鈔図像』(b)、『八大明王図像』(c)の順に配列した。

(1) 不動明王〔地神〕



(1) a



(1) b



(1) c

(形状)

一面二臂二足。正面を向き両目を開き、眉間に皺を寄せる。頭部には髪際にヘアバンド状の飾りをつけ、その少し上に恐らくは花飾りを表す。頭髪はこの花飾りの辺りから集められて左耳後ろを通して左肩に垂下させる。右手を屈し剣を執り、左手を屈し掌を上にして羂索を握る。岩座上に右足外の半跏趺坐をする。着衣は条帛・腰衣・裙・天衣。装身具は両腕釧を付けるか。頭光・火焰光背を表す。

(所見)

不動明王は『八大明王図像』、『四家鈔図像』、及び『大妙金剛經』に記す「遍身^F色放火光焰。以右手執劍。左手把索。左垂一髻。」とも共通する一面二臂二足の姿である。但し、真身宝函中の姿は『四家鈔図像』や『八大明王図像』のように、顔を右斜めに向ける姿（『八大明王図像』では視線を正面に向ける）とは異なり、正面向きで表される点が大きな差として指摘でき、加えて天衣を纏う姿は中国の作例では多く見るものの、日本では『四種護摩本尊並眷属図像』のうちの尊勝曼荼羅中の不動明王の姿以外には殆ど確認できない。また、特に頭髪表現に注目し、垂下部からの輪郭線を追っていくと、日本では例の少ない頭頂で髪を集め、その髪を左肩に垂らす表現と見られ、恐らくはアメリカ・フィールド博物館所蔵像〔8世紀中頃末〕【図1】に近い姿と考えられる（但し髪はフィールド博像ほど長く垂らさず、肩辺りまでである）。以上の三点に関しては『八大明王図像』、『四家鈔図像』（但し本図は頭部の表現が不明である）との大きな違いとして指摘できる。加えて筆者のかねての着眼点に辮髪の結数の問題がある。フィールド博像及び『八大明王図像』の不動明王は同じく垂下する髪を三箇所紐で括っており、日本においていわゆる空海請来の高雄曼荼羅様と呼ばれる図像に見る七箇所や、真寂親王〔886～927〕が『諸説不同記』を著す際に眼にしていた胎藏曼荼羅図や現在の東寺講堂不動明王坐像、東寺藏元禄本胎藏曼荼羅図に見る五箇所の括りとの重要な違いと言える。この三結は『大日経』、『蘇悉地経』などに説く「三部」と関わるもの（『蘇悉地経』に説く三部結髪か）と考えているが、本論では推論に留めることとする。以下に見ていく他の明王が持物とする金剛杵が三鈷杵であること、界道に表される三鈷杵を含め、全体的な背景としての「三」の思想の存在が窺える。真身宝函の図像は細部の図像が不明瞭なのだが、恐らくは垂下する髪に結び目を表さない姿と思われ、円珍請来『五菩薩五忿怒像』のように捻れて垂下する髪形、いわゆる「葛髻」と表現される髪形と考えられる。また不動明王の場合、持物の剣が火焰を伴うか否かも重要な図像差と考えられるが本像ではその有無は不明瞭である。

(2) 大笑明王〔水神〕



(2) a



(2) b



(2) c

(形状)

一面二臂二足。頭飾を付け、頭髪は三束の焰髪状に表し、鬢髪も左右に焰髪状にする他、顎鬚を生やす。左手を下方に伸ばし棒（金剛棒？）の上に手を置き支え、右手は緩く曲げて繩索を握る。岩座上に

坐し、左足を坐上に組上げ、右足を若干くずして下げる。着衣は条帛・腰衣・裙・天衣で、裙裾は膝上辺りまで捲れる。装身具は足釦を付けるか。頭光・火焰光背を表す。

(所見)

『大妙金剛經』に記す「口現大笑形二牙上出。以左手柱一棒。右手把繩索。」の記述とは左右の持物は反対である（左右持物の入れ替わる図像は不動明王など他の明王像にもしばしば確認できる）ものの合致するが、『八大明王図像』、『四家鈔図像』とは以下の点で差が見られる。『四家鈔図像』では、宝冠を付ける点、顎鬚を生やさない点、左右持物が逆である点、坐勢が両足裏を合わせて坐す点で異なる。『八大明王図像』では、左右持物が異なる他、金剛棒は柄の長い不明な持物（日本に残る仏眼曼荼羅やその白描図像を見ると宝幢か）となっている点、足首を交差させる坐勢となっている点が異なる。

(3) 無能勝明王〔火神〕



(3) a



(3) b



(3) c

(形状)

一面二臂二足。頭飾を付け、髪は三束の焰髪を表す。相貌は開口するか。右手を屈して金剛杵(三鈷杵)を持ち、左手は拳を結び人差指を立てる斯刻印を表す。岩座上に坐し、両足踵を合わせる様な坐勢を表す。着衣は条帛・腰衣・裙・天衣で裙は膝上辺りまで捲くれる。装身具は胸飾が確認できる。頭光・火焰光背を表す。

(所見)

『大妙金剛經』に記す「遍身黄色放火光焰。以右手擲一金剛杵。左手作擬印向口。」に概ね適うが、印相に関しては「左手作擬印向口」とあり、人差指を口に向けない点が異なる。『四家鈔図像』とは概ね一致するが、『四家鈔図像』では印を口に向ける点に『大妙金剛經』の記述に倣う表現が見られる。また、坐勢であるが『四家鈔図像』では右足外に両足踵を交差する坐勢を表す点で違いが見られる。一方で、『八大明王図像』中の無能勝明王は以上の姿と大きく異なり、三面四臂二足で蓮華座に坐す姿であり本像や後に記述する馬頭明王も含め『八大明王図像』で大きく変化が見られる尊像に関しては後章で検討を加えることとする。坐勢については両足踵を交差させる方がもともとの姿で、真身宝函では踵を合わせるような姿で表されたものと考えられる。

(4) 歩擲明王〔風神〕



(4) a



(4) b



(4) c

(形状)

一面二臂二足。頭部表現が不詳であるが、頭飾をつける。右手を屈し、腰脇で傘蓋を持ち、左手を屈し左肩前辺りで金剛杵(三鈷杵)を持つ。岩座上に坐し、右足を下ろし、左足を緩く台座上に組み上げるような坐勢を表す。着衣は条帛・腰衣・裙・天衣で裙は膝上辺りまで捲くれる。装身具は胸飾が確認できる。頭光・火焰光背を表す。

(所見)

本像に関しては各図像に以下に記す差異は見られるものの、『大妙金剛經』に記す「以右手把一旋蓋。左手把金剛杵。遍身作虚空色放火光焰。」の記述を含め概ね一致を見る。本像との差異は、『四家鈔図像』は宝冠を被る点、上半身は条帛を着けず裸形とする点、左右の足の仕草が本像と逆になる点、台座が蓮華座である点、『八大明王図像』は宝冠を被り、岩座上に半跏趺坐する点である。

(5) 馬頭明王〔降三世明王〕



(5) a



(5) b



(5) c

(形状)

一面二臂二足。頭上に馬頭を表す。右手を屈し蕾の蓮茎を持ち、左手を屈し水瓶を執る。岩座上に右足を組み上げ、左足を下げる。着衣は条帛・腰衣・裙・天衣で裙は膝下辺りまで捲くれる。装身具は腕釧を付けるか。頭光・火焰光背を表す。

(所見)

本像に関しては『大妙金剛経』に記す「於頂現作馬頭金剛明王。碧色放赤色光明。以右手高於頂上。横把一蓮華作打勢。左手把軍持印。」の記述には合致するが、『四家鈔図像』では頭部に馬頭を付ける宝冠を被る点・右手の蓮茎が宝棒である点・台座が蓮華座である点に差異がみられ、この姿は佛眼曼荼羅中の馬頭明王にも見られる。一方、『八大明王図像』では無能勝明王と同様に三面八臂二足で蓮華座に半跏趺坐する多面多臂の姿で表される。日本で確認できる一群の八大明王の図像中に真身宝函に見られる姿の馬頭明王は確認できないが、『諸観音図像』の中に蓮華座に坐す姿で確認することが出来る。

(6) 大輪明王〔軍荼利明王〕



(6) a



(6) b



(6) c

(形状)

一面二臂二足。頭飾を付け、三束の焰髪を表す。右手を屈し金剛輪を握り、左手を下げて地につける金剛杵(独鈷杵)を支える。岩座上に坐し、右足を緩く曲げ台座にのせ、左足を下げる。着衣は条帛・腰衣・裙・天衣で裙は膝上辺りまで捲くれる。頭光・火焰光背を表す。

(所見)

本像に関しては『大妙金剛経』に記す「遍身黄色放大火。右手持八幅金剛輪。左手柱一獨股金剛杵。」の記述に合致する他、『四家鈔図像』と『八大明王図像』と細部の差は見られるものの概ね一致する。『四家鈔図像』では宝冠を被り、法輪を握らず掌の上に載せ、独鈷杵も腰脇で握る他、蓮華座上に遊戯座で坐す点、頭光のほかに身光を伴う点に差異が見られ、『八大明王図像』は掌を外に向ける形で金剛輪を胸前で握り、坐勢も右足上に脛を交差させる坐勢をとる点に差異がみられる。

(7) 降三世明王〔金剛夜叉明王〕



(7) a



(7) b



(7) c

(形状)

一面二臂二足。右手を屈し金剛杵(三鈷杵)を逆手で握り、左手は拳を結び腰脇にあてる。岩座上に半跏趺坐する。着衣は条帛・腰衣・裙・天衣を着ける。頭光・火焰光背を表す。

(所見)

本像は『大妙金剛經』に記す「放_F色光明口現二牙。阿_J入笑聲_J以右手擲五股金剛杵。」の記述に適う姿であり、『四家鈔図像』では宝冠を被る点、右手だけではなく左手も金剛杵(三鈷杵)を持つ点(仏眼曼陀羅では基本的には右手に三鈷杵、左手は拳を腰脇にあてる)、蓮華座の坐り方が遊戯坐のような姿である点、頭光を表さない点で違いが見られる。また『八大明王図像』では宝冠を被る点、蓮華座に半跏趺坐する点に差異が見られる。真身宝函の姿は口元の細部が表されないが『四家鈔図像』、『八大明王図像』では「二牙を現す」とする『大妙金剛經』の記述に適う表現もなされている。

(8) 大威徳明王〔不動明王〕



(8) a



(8) b



(8) c

(形状)

六面二臂二足。本面の左右に脇面を表し、本面の上部に小面を三つ表す。右手を屈し剣を執り、左手は拳を結び腰脇にあてる。着衣は条帛・腰衣・裙・天衣を着ける。装身具は胸飾が確認できる。頭光・火焰光背を表す。

(所見)

『大妙金剛經』には「現作六臂六頭六足金剛明王。放_F 黑色光明。齒咬下唇豎_L 目及眉。手持利劍。」と記され、ここに記す「六臂六頭六足」が八大明王中のこの尊格の姿を示すのか、それとも「六臂六頭六足金剛明王」で「大威徳明王」を示す固有名詞として捉えるべきかを考える必要があるが、六臂の姿であるならば後半に記す持物の項目が「手持利劍」のみというの気がかりであり、本像に見るような六面二臂二足の姿を示す余地も残すか。六面六臂六足の姿は『八大明王図像』中の姿を含め日本では多く見ることのできる大威徳明王の姿である。本像の姿は蓮華座上で脛を交差させる点で違いが見られるが、『四家鈔図像』の姿や仏眼曼荼羅中の姿と共通している点が注目される。馬頭明王・無能勝明王と同様に『八大明王図像』において多面多臂の姿へと変化が起こる一尊である。

以上のように尊名を比定し、真身宝函中に配置すると〔資料1〕のようになり、この配置を見ると、円環状に配置する時、東・西・南・北・東北・東南・西南・西北の八方に置かれる各尊が二尊ずつ区切られ四方に配置されており、『大妙金剛經』には八大明王は八大菩薩が変化した姿として位置づけられ、金剛手（降三世）・妙吉祥（大威徳）・虚空蔵（大笑）・慈氏（大輪）・観音（馬頭）・地藏（無能勝）・除一切蓋障（不動）・普賢（歩擲）の順で記されているが、八大菩薩、八大明王の配置に関しては必ずしも一様ではなく、後述するように真身宝函中の八尊は『大妙金剛經』の記述に従い円環状に配置した順とは異なり、八大菩薩を表す作例の中では不空〔705～774〕系の尊勝曼荼羅図の八大菩薩【図2】の配置順や日本に残る「阿弥陀八大菩薩曼荼羅」の八大菩薩曼荼羅【図3】の八大菩薩の配置順に合う点が注目される。八大菩薩は円環状に配される場合の他に、主尊の左右に四尊ずつ配される場合などがあるが、その順序に関して経典には那堤訳〔663年訳〕『師子莊嚴王菩薩請問經』（大正蔵第14巻、No.486、p697）、不空訳『八大菩薩曼荼羅經』（大正蔵第20巻、No.1167、p675）に「標準型の八大菩薩」とされる（註7）観音菩薩・慈氏（弥勒）菩薩・虚空蔵菩薩・普賢菩薩・金剛手菩薩・文殊菩薩・除蓋障菩薩・地藏菩薩の順に記され、これは先の不空系の尊勝曼荼羅図の八大菩薩の配置にも通じるものであることが指摘されている（註8）。この不空系の尊勝曼荼羅が胎蔵曼荼羅の前段階を示すものか、胎蔵曼荼羅の主要な尊格を抽出したものかは研究者により意見がわかれており、本稿では真身宝函の八大明王の配置が八大菩薩で考えた場合、胎蔵系の流れを組む配置であるということの確認に留めることとする。

以上の考察の中で①真身宝函中の八大明王像はみな岩座を台座としているのに対し、『四家鈔図像』ではすべて蓮華座（但し不動明王のみ蓮華座の下に瑟瑟座）となり、『八大明王図像』では馬頭明王・無能勝明王・降三世明王が蓮華座、大威徳明王が青水牛座、その他の四明王が岩座になっているということ、②『八大明王図像』では馬頭明王・無能勝明王・大威徳明王の各像が多面多臂の姿となるという尊容の変化、つまりは『大妙金剛經』の記述と異なる八大明王図像の存在、③各八大明王の一群での装身具や持物の差、など八大明王の群像としての表現ならびに個々の尊容の変化に関しては様々に重要な問題が含まれており、これら諸問題に関しても以下に可能な限り考察を加えていきたい。

2. 八大明王の図像に関して

八大明王の像容をまとめて記す文献資料の一つである『大妙金剛經』は、晩唐期の訳出と考えられて

おり、下泉全暁氏は中国で八大明王というグループが初めて知られるようになったのは、空海帰朝以後、『大妙金剛經』を請来する慧運と『八大明王図像』を請来する円仁が帰朝するまでの間、つまり九世紀前半～中期にかけての時期と推測されている(註9)。円仁請来とされる『八大明王図像』の成立期がこのあたりに位置づけられるのは筆者も同感であるが、真身宝函に見る図像は『大日経』胎藏系の図像が含まれ、『胎藏旧図様』以前の図像と考えられる姿も含まれることから成立年代は下泉氏の指摘よりやや遡るのではないかと考える。ただ、八大明王が造像に登場する時代として胎藏・金剛界の「両部」から胎藏・金剛界・蘇悉地の「三部」が重視され、特に蘇悉地の隆盛が起こった時期に位置づけられる点は注目され、『大妙金剛經』は恐らくは晩唐期にあって善無畏系の解釈が残った、もしくはこの時期に改めて取り上げられたものの一つではないかと推測する。

先に見てきたように『大妙金剛經』の記述のみで八大明王の図像が造形化されたわけではないことは明らかで、幾つかの異なる典拠が存在したか、あるいは八大明王という八体の明王群の觀念が存在し、個々の像容に関しては同じ尊格でも新しい図像と古い図像が交換されたり、『大妙金剛經』とは異なる八体の尊格の組み合わせも存在したのではないかと考えられる。

まず不動明王であるが、先にも記したように頭髮及び頂相の表現において真身宝函の図像と『八大明王図像』では大きな差が存在する。『八大明王図像』中の姿は空海(774～835)が恵果より伝えられ請来した姿からの転写本と考えられる京都・神護寺高雄曼荼羅中の不動明王〔天長年間後半〕の像容と近く、この姿が恐らくは恵果以降の流れを汲むものであることがわかる。一方で真身宝函の姿は、正面観の姿も合わせ『胎藏旧図様』以前の『大日経』胎藏系の図像として指摘される(註10)アメリカ・フィールド博物館所蔵像に特に近く、『大日教疏』系の中国・西安碑林博物館所蔵像〔8世紀末〕、その他に敦煌将来のフランス・ギメ美術館所蔵千手千眼曼荼羅中の不動明王像〔唐末～北宋〕、中国・敦煌莫高窟第14窟千手千鉢文殊曼荼羅图中的不動明王像(推定)〔晚唐〕【図4】、日本に残る五大明王鈴などで見られる一系統に属するものであり、少なくとも恵果-空海以前の『大日経』胎藏系の不動明王の図像と考えられる。

胎藏系として捉えられるのは降三世明王も同様で、真身宝函中の姿は『胎藏旧図様』【図5】や普賢延命曼荼羅図〔円仁請来〕【図6】(但し持物は独鈷杵)などに見られる姿であり、円珍〔814～891〕請来の『五菩薩五忿怒像』【図7】や現図胎藏曼荼羅持明院の抜折A 吽迦羅金剛に見るような金剛界系の降三世明王の姿ではない。しかし、真身宝函の降三世明王は右手で金剛杵を抽擲する仕草が、『八大明王図像』の姿や『胎藏旧図様』中の図像のように掌を上にし、広げた掌に金剛杵を載せる(これは現図胎藏曼荼羅金剛部院の金剛薩cの仕草と同じである)のではなく、手首を捻り握った掌を手前に向けて金剛杵をつかむ仕草(これは『五部心観』中の金剛薩c【図8】や現図金剛界曼荼羅中の金剛薩cの仕草と同じである)で表され、降三世明王の菩薩の姿として位置づけられる金剛手菩薩即ち金剛薩cを考える時、その姿は寧ろ金剛界系の金剛薩cの図像からの影響を受けているものと考えられる点が注目される。

次に『八大明王図像』において大きく像容が変化している無能勝明王・馬頭明王・大威徳明王に関して見ていきたい。無能勝明王は、真身宝函や『四家鈔図像』に見られる一面二臂二足の姿の他に、三面四臂二足の姿が存在し、『八大明王図像』や恵什撰『図像抄』〔1135～1141〕などに確認することができ、法門寺地宮出土の捧真身菩薩台座八大明王中の無能勝明王【図9】もこの姿をしている。また、現図胎藏曼荼羅中に見られる無能勝明王は頭上に小型の一面を加え四面四臂二足で踏割蓮華座に立つ姿で釈迦の左下方に描かれ、一字金輪曼荼羅の七宝の一つ兵宝にあたる尊像がこの四面四臂二足の無能勝明王の姿で描かれる場合も見られる(注:一面二臂二足の姿の場合もある)。

次に馬頭明王であるが、既に指摘されている(註11)ように胸前で馬口印を結ぶ姿は不空の訳経に見られるものであり、この姿を表す作例が西安碑林博物館所蔵大安国寺址出土の白石像〔8世紀中頃～末〕

【図10】やギメ美術館所蔵千手千眼観音曼荼羅図〔唐末～宋代〕【図11】など中国でも実作例が確認できる。八大明王の内、この図像系統に属するものが『八大明王図像』、捧真身菩薩台座の八大明王中の姿に見ることができ、これらは不空〔705～774〕以降の図像による馬頭明王である。一方で、真身宝函中の姿は一面二臂二足の姿で、未敷蓮華の茎、軍持(水瓶)を持物とする点に特徴がある。この図像は『大妙金剛経』の記述に一致するが、日本で見られる別尊曼荼羅中の八大明王の馬頭明王は蓮茎ではなく金剛棒(宝棒)を持物とする場合も多く、真身宝函に見る姿は図像集の中でも『諸観音図像』【図12】で確認できるように、観音の性格を含むものと言える。尊格としての馬頭の出自はインドに見られるハヤグリーヴァであることは既に多くの諸先学により指摘されているが、彼らの持物は蓮茎ではなく金剛棒(宝棒)であることが多く、蓮華を持つようになるのはやはり観音との関連によるものと考えられる。真身宝函中の馬頭明王は恐らくは不空以前の図像に基づくものと考えられる。合わせて馬頭明王について注意すべき点は、蓮茎・軍持を持物とし三面二臂二足で表される姿〔ex:東京・品川寺蔵、仏眼曼荼羅〕や馬口印を結ぶ三面二臂二足で表される姿〔ex:京都・神護寺蔵、高雄曼荼羅胎蔵界蓮華部院の馬頭観世音菩薩〕が存在することである。また『胎蔵旧図様』にも馬頭明王が見られるが、その姿は三面二臂二足で表され、左手に蓮茎を持ち、右手は印相(軍持印?)を表す。

次に大威徳明王であるが、六面二臂二足の特異な姿である。大威徳明王も図像集に様々な姿が残るようになつたかのバリエーションが存在するが、『八大明王図像』に見る六面六臂六足の姿で、左右第一手が矢をつがえる姿は、円珍請来『五菩薩五忿怒像』中の姿【図13】、この図像との類似が指摘されている(註12)唐代の明王鈴、『胎蔵旧図様』中の「東南角六臂尊及五侍童子」【図14】などに見られる姿であり、不空の図像との関わりが考えられる。また、同じく六面六臂六足の姿でも左右第一手が檀拏印を結ぶ姿【図15】が空海請来の現図系の図像である。真身宝函に見る六面二臂二足の姿は、仏眼曼荼羅など別尊曼荼羅中に継承され、単独の図像としても『明王部図像集』に白描図像が残る【図16】。この姿は、善無畏系の図像とされる『胎蔵図像』中にも確認でき【図17】、一行〔638～727〕『大日経疏』に確認できる「六面尊」に当たるものと思われる。大威徳明王もまた不空以前の寧ろ善無畏〔637～735〕系の図像によるものかと考えられる。

多面多臂の無能勝明王・馬頭明王・大威徳明王は、八大明王の構成の他に菩提仙〔824年頃〕訳『大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』(『八字文殊儀軌』:大正新脩大藏経第20巻密教部三 No.1184)により作られる八字文殊曼荼羅において降三世明王を含めた四大明王として曼荼羅中の四隅に配置される明王たちであることも注目される。この場合、降三世明王(降三世金剛)は三面八臂二足の金剛界系の姿として経典にも記され、無能勝明王が三面四臂二足(蓮華座)、大威徳明王(閻魔徳迦金剛)が六面六臂六足(青水牛)、馬頭明王が三面八臂二足(蓮華座)・第一手は馬口印の各像容であることから、この曼荼羅中に描かれる明王は不空以降の図像によるものであることが窺えるが、『八大明王図像』において変化の著しい三尊に関してはこのような別系の構成による場合の姿が同じ尊格ゆえにそのまま置き替わった可能性も考えられる。

以上の尊格の他、歩擲明王・大笑明王・大輪明王は単独尊としての受容が少なく、且つ別尊曼荼羅でも八大明王以外の構成に登場しない為か微妙な像容の違いを除けば、真身宝函中の姿は『大妙金剛経』の記述、『四家鈔図像』、『八大明王図像』中の姿とも概ね一致し、古様な姿のままで図像が継承されていることが分かる。ただし、同じ871年銘を残す捧真身菩薩台座中の姿や剣川石窟石鐘寺明王堂の姿では多面多臂の姿で表されることから、明王像全般における多面多臂の姿への像容の複雑化という流れにも注目する必要があるだろう。

次に八尊全体を見た場合の装身具、台座の問題を考えてみたい。『大妙金剛経』には台座に関する記

述はどの尊像に対しても見られないが、真身宝函中の八大明王像の台座はすべて岩座で統一されているのに対し、仏眼曼荼羅の場合は蓮華座に統一され、『四家鈔図像』でも同じく蓮華座に統一されている。一方で、『八大明王図像』では蓮華座、岩座、青水牛座と統一されておらず、同様に捧真身菩薩台座の八大明王も大威徳明王が青水牛座ではなく岩座で表されるが、尊格によって岩座と蓮華座の別が見られる。岩座から蓮華座への変化は尊格の昇格を示すものであり、総ての明王がどちらか一方で統一されている場合、曼荼羅の中での統一性を図ったものとしても捉えられるだろう。真身宝函は曼荼羅の構成の中で表される明王像がみな岩座であるが、これはこれら明王群が護法尊的な役割を強く残すことを示すものと考えられる。また、『八大明王図像』では台座にバラつきが見られるが、それは一群で表される明王像の中でも尊格ごとに図像の出入りがあることを示唆するものではないかと考える。また、装身具において注目されるのが、仏眼曼荼羅中の八大明王が時に頭上に獅子の冠を載せることであり、これは『瑜祇経』に記される「右旋各畫八大金剛明王。又於華院外四方面。畫八大供養及四攝等使者。皆載師子冠。」の記述が影響したものと考えられる。また、真身宝函中の八大明王像はみな天衣を身に着けるが、日本の作例の中には天衣を表す明王像がほとんど見られず、この差は中国の明王像と日本の明王像との大きな違いの一つとして指摘できる。

3. 法門寺地宮出土の真身宝函に表される密教尊像の位置づけについて

次に、真身宝函全体の構成に関して触れておきたいと思う。各尊格の名称及びその配置は〔資料1〕を参照していただきたい。蓋の上面は、中心に金剛界大日如来を配置し、その上下左右(十字状)に四波羅蜜菩薩、四隅(X字状)に内供養菩薩を配置している。大日如来は西方にあたる面に頭を向けており(西を上方に位置づけるのは金剛界曼荼羅と同じである)、この四方を八大明王と外供養菩薩、四摂菩薩が取り巻いている。

残りの四仏、各四親近菩薩(十六大菩薩)は如来を中心にX字状に配置され、各上方の蓋の側面にあたる区画には中心に蓮華で口を押さえた宝瓶をあらわし、その左右に各方角に関係する三昧耶形(東方:金剛杵、南方:宝珠、西方:蓮華紋のある輪、北方:羯磨)をあらわしている。また各曼荼羅図を囲む界道は三鈷杵で結界され、全体を通して余った空間は植物文様(宝相華文)で埋めている。

金剛界三十七尊と八大明王の関係は、捧真身菩薩の台座と同じあり、当時の一つの表現形式であったことが窺われる。捧真身菩薩台座の八大明王は円形に配置されるのに対し、真身宝函では方形に区画された四方に各二尊ずつ配分される点が異なるが、どちらの場合も八尊がこの曼荼羅の護法尊的な役割を担っているものと考えられる。

頼富氏が捧真身菩薩台座の考察において指摘されたように(註13)、この真身宝函の場合も三十七尊と八大明王を表すことから『瑜祇経』との関わりが推測される。『瑜祇経』は、日本では特に東密において金胎両部不二の深義を説く経典として重視されたが、真身宝函の尊像がこの経典に説く「両部不二」の思想に基づくならば、中国での「両部不二」を一つの作品の中に表現する思想に基づく具体的な作例の一つとして重要な意味を持つものと言える。ただし、先にも記したように『瑜祇経』には「皆載師子冠」という記述が有ることから、捧真身菩薩台座の八大明王も真身宝函の八大明王も直接の典拠として『瑜祇経』そのものを位置づけられるかどうかは更なる検討を要するが、背景には同一系統の発想が存在したのは確かであろう。

また、捧真身菩薩台座の八大明王に関しては、頼富氏の研究による上部に表される八大菩薩の種子との関連からその変化身に対応する明王の尊名をあてることが妥当であると思われ、馬頭明王・大威徳明王・無能勝明・降三世明王は尊名と図像が合致し確実である。しかし、その他の四体の明王に関しては

若干の疑問があり、下泉氏と頼富氏は傘蓋（旋蓋）を持つことから【図18】の尊格を歩擲明王とされるが、この持物は同じ八大明王中の大威徳明王【図19】も持つことから、金剛棒（宝棒）と捉えるべきものと考え、第一手が右胸前に数珠を持ち、左手を与願手とする点は図像的には烏枢沙摩明王ではないかと考える。さらに各手の持物を検討すると数珠と索を持つ手が入れかわっているが『胎藏旧図様』中の金剛童子【図20】とも概ね共通する点が注目され、捧真身菩薩台座では大威徳明王に関してもやはり不空との関わりが指摘されている『胎藏旧図様』中の姿との共通性が見られることから、多くの明王が不空系の図像によることになる。

尊名に関しては八大菩薩を表す種字との対応から導き出される尊名で捉えるべきと考えるが、図像の選択が八大菩薩に対応する各明王の尊名とすべて一致しているかどうかは疑問が残り、例えば日本に残る広島・福盛寺五大明王鈴〔唐末～宋代か〕のように、五大明王を表しながらも烏枢沙摩明王と思われる姿が同じ姿で二体表される例もあることから、こうした図像的な不自然さが作業工程の事情が原因したものなのか、当時の明王像に対する何らかの意識によるものなのか検討を要する。合わせて『大妙金剛経』に記す八尊以外の八大明王のグループの存在も考える必要がある。

また、八大明王の配列であるが基本的には八大菩薩の配列をまず考える必要があると思われるが、〔資料2〕に見るようにその方位と配列の順序が定まっていなかったことが注意される。八大明王の配置の問題に関しては既に下泉全暁氏が着眼されており、下泉氏の見解によるとまず仏眼曼荼羅においては『大妙金剛経』の八大菩薩と八大明王の対応関係と異なり、八大菩薩のうちの地蔵・除蓋障・普賢の三菩薩が虚空蔵・金剛拳・摧一切魔の三尊に変化するのに対し、対応する八大明王は『大妙金剛経』に説く順に表されることが指摘され、八大菩薩は『理趣経』『説会曼荼羅』を基本とし、八大明王は『大妙金剛経』に説く各明王を順に配置したと指摘されている。また、『八大菩薩曼荼羅経』と『大妙金剛経』の配置を比較した場合、金剛手菩薩を間に挟んで文殊菩薩と普賢菩薩の左右が異なることが指摘されており、下泉氏は大足宝頂山石刻や石家荘毘盧寺なども『大妙金剛経』にもとづく配列によるものとして指摘されている（註14）。

しかし、捧真身菩薩台座（降三世から右旋：降三世・大威徳・大笑・無能勝・馬頭・大輪・歩擲・不動）や剣川石窟石鐘寺明王堂の八大明王像（左右四尊ずつの配置であるが、短冊の方位に従い東南降三世より右旋させた場合：降三世・無能勝・大輪・馬頭・大笑・歩擲・不動・大威徳）は『大妙金剛経』の配置には一致しておらず、これは八大菩薩の図像及び配置にも諸相があることも合わせて考えなければならない問題である。先にも記したように真身宝函の八大明王の配置順序は、八大菩薩との対応で考えるのであれば『大妙金剛経』や仏眼曼荼羅の順ではなく、不空系とされる尊勝曼荼羅に見る標準型の八大菩薩の配置（『八大菩薩曼荼羅経』）に共通することが注目され、同種の配置は日本の「阿弥陀八大菩薩曼荼羅」にも見ることができ、真身宝函の曼荼羅構成が作られる背景を示唆するものとして注目できる。この二図では胎藏大日・阿弥陀が中心に配されているが遼寧省・朝陽北塔天宮より発見された金銀経塔（1043年銘）第三重のように智拳印を結ぶ金剛界大日を中心にその周りに同系の八大菩薩を配置する作例も存在している。この標準型の八大菩薩と『大妙金剛経』の八大菩薩の配置では、虚空蔵と除蓋障、地蔵と慈氏（弥勒）の位置がそれぞれ入れかわっている。

真身宝函の八大明王の存在は、日本に残る『四家鈔図像』や仏眼曼荼羅で表される八大明王の姿の源が唐末の中国に存在したことを証明し、更に『大妙金剛経』の記述に概ね共通点を持ちながら、曼荼羅として配置される際には不空系とされる尊勝曼荼羅の八大菩薩の配列に倣う配置を見せる貴重な一史料であり、同じく咸通十二年〔871〕の銘を残す捧真身菩薩台座の八大明王と並ぶ、現存最古の中国における八大明王の作例として位置づけられるものである。同時期かつ真身宝塔の地下宮殿という同一奉

納場所で発見された作例に、系統の異なる八大明王の図像が表されていることは、当時の中国の密教僧たちが所持していた図像の問題や彼らの法脈（血脈）、合わせては日本の東密・台密間の交流のように異なる法脈間の図像の交流が存在するかどうかなど追及すべき課題は多く残されているが、本稿で端的な結論を導くことは不可能であり、今後中国に残る明王像全般の検討を継続していくことで方向性を導き出していきたいと思う。

おわりに

中国唐代の明王像は、敦煌や安西に残る絵画作例を含めれば決して件数が少ないわけではないが、尊名が比定された確実な資料が少なく、中央の作例がほとんど失われていることから当時の図像や信仰を復元することが容易ではない。しかし、中国の明王図像の多様性を明らかにし、日本に伝わった図像の出自を少しでも確認し、比較対照することが中国・日本の明王の図像を考えて行く上での重要な突破口を生むものと考えている。今回は四大神と四大明王と指摘されていた真身宝函中に表される八体の尊像に関して、これらを八大明王の一群であることを指摘するとともに、各明王の図像に関して若干の所見を述べ、研究が行き届かぬ点もあるがこれらの配置に関して八大菩薩との関係から一考を試みた。細部の差が示す意味などは十分に検討が加えられたとは言えないが、今後の研究を通し訂正・補足していきたい。

【主要参考文献リスト】

〔漢訳経典〕

- 那提訳『師子莊嚴王菩薩請問經』（大正新修大藏經第14巻経集部一、No.486）
善無畏訳『大毘盧遮那神變加持經』（大正新修大藏經第18巻密教部一、No.848）
善無畏・一行『大毘盧遮那神變加持經疏』（大正新修大藏經第37巻経疏部七、No.1796）
輪婆迦羅訳『蘇悉地羯羅經』（大正新修大藏經第18巻密教部一、No.893）
不空訳『八大菩薩曼荼羅經』（大正新修大藏經第20巻密教部三、No.1167）
達磨栖那訳『大妙金剛甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經』（大正新修大藏經19巻密教部二、No.965）
菩提仙訳『大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』（大正新修大藏經第20巻密教部三、No.1184）
金剛智訳『金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經』（大正新修大藏經第18巻密教部二、No.867）

〔図像関連〕

- 『諸説不同記』法三宮真寂 大正新修大藏經 図像第1巻所収
『図像抄』大正新修大藏經 図像第3巻所収
『別尊雜記』大正新修大藏經 図像第3巻所収
『阿娑縛抄』大正新修大藏經 図像第9巻所収
『四家鈔図像』大正新修大藏經 図像第3巻所収
『八大明王図像』（宗実本、良慶本）大正新修大藏經 図像第6巻所収
『明王部図像集』大正新修大藏經 図像第6巻所収
『諸観音図像集』大正新修大藏經 図像第12巻所収
『曼荼羅集』大正新修大藏經 図像第4巻所収

〔文献〕※50音順に記す。敬称略にて失礼いたします。

- 石田尚豊（1965）「恵果・空海系以前の胎藏曼荼羅」（『東京国立博物館紀要1号』）
石田尚豊（1975）『曼荼羅の研究』東京美術
岡崎譲治（1966）「仏像鈴所頭の五大明王像」（『仏教芸術』264号）
韓偉（1992）「法門寺唐代金剛界大曼陀羅成身会造像宝函考釈」（『文物』1992年第8期）
韓金科編著（1998）『法門寺文化史（下）』五洲伝播出版社

- 京都国立博物館編（1981）『画像 不動明王』同朋舎出版
- 気賀澤保規（1988）「扶風法門寺の歴史と現状—仏舎利の来た寺」『仏教美術』179、毎日新聞社
- 気賀澤保規（1999）「法門寺の歴史と舎利供養」『唐皇帝からの贈り物展図録』所収
- 呉立民・韓金科（1998）『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』中国仏教文化出版
- 下泉全暁（1990）「中国大足石刻の十忿怒明王像について」『密教学研究』22
- 下泉全暁（2000）「香川・普門院蔵 五忿怒尊像について」『密教図像』第十五号
- 田中公明（2000）「敦煌出土の八大明王儀軌について」（同著『敦煌の密教美術』法蔵館 所収）
- 田中公明（2004）『両界曼荼羅の誕生』春秋社
- 朝陽北塔考古勘察隊（1992）「遼寧朝陽北塔天宮地宮清理簡報」『文物』、1992年第7期
- 中川千咲（1936）「長尾氏蔵五鈷鈴解」『美術研究』71
- 朴亨國（2000）「大阪金剛寺金堂の金剛界大日・不動・降三世の三尊形式に関する一考察—中国四川省盤陀寺石窟の大日三尊龕の紹介を兼ねて—」『仏教芸術』252号
- 朴亨國（2001）「中国の変化観音について」『シルクロード学研究 Vol.11 観音菩薩像の成立と展開—変化観音を中心にインドから日本まで—』シルクロード学研究センター 第四章所収
- 林温（2002）『日本の美術 6 No.433 別尊曼荼羅』至文堂
- 真保亨（1985）『別尊曼荼羅』毎日新聞社
- 密教辞典編纂会（1931、初版）『密教大辞典 縮刷版』法蔵館
- 頼富本宏（1974）「八大菩薩像について」（佐和隆研編『密教美術の原像』法蔵館 所収）
- 頼富本宏（1990）「インドの八大菩薩」、『チベットの八大菩薩』（同著『密教仏の研究』法蔵館 所収）
- 頼富本宏（1998）「五大明王の成立と展開」『山崎泰廣教授古稀記念論集 密教と諸文化の交流』山喜房仏書林 所収
- 頼富本宏（1998）「明王鈴について」『佐藤隆賢博士古稀記念論文集・仏教教理思想の研究』山喜房仏書林 所収
- 頼富本宏（1999）「中国の密教美術」（立川武蔵・頼富本宏編『シリーズ密教 3 中国密教』春秋社 所収）
- 頼富本宏（2000）「中国・法門寺出土の密教系遺品」『高木元博士古稀記念論集 仏教文化の諸相』所収
- 矢代幸雄（1937）「唐石彫不動明王像」『美術研究』71
- 李昆声主編（1999）『南詔大理国彫刻絵画芸術』雲南人民出版社

【図版】

法門寺関係の図版はすべて『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』からの転写である。その他の図版の典拠は下記の通りである。

（刊行書籍からの転写）

- 【図1】：矢代幸雄『東洋美術史論考』昭和17年 座右寶刊行会
- 【図2】：『曼荼羅集』大正新脩大蔵経 図像第4巻所収
- 【図3】：『別尊雜記』大正新脩大蔵経 図像第3巻所収
- 【図4】：『敦煌石窟藝術』莫高窟第14窟 江蘇美術出版社
- 【図5】、【図14】、【図20】：大正新脩大蔵経 図像第2巻所収『胎藏旧図様』
- 【図6】：『画像 不動明王』同朋舎出版
- 【図7】、【図14】：大正新脩大蔵経 図像第2巻所収『別尊雜記』
- 【図8】：大正新脩大蔵経 図像第2巻所収『五部心観』
- 【図9】、【図18】、【図19】：法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』中国仏教文化出版
- 【図10】：曹剛責任編集『西安碑林博物館』2001年発行 陝西人民出版社
- 【図11】：ギメ美術館調査時に写真部より御提供頂いた写真による。
- 【図12】：『諸観音図像集』大正新脩大蔵経 図像第12巻所収
- 【図15】：大正新脩大蔵経 図像第1巻所収『御室版胎藏曼荼羅』
- 【図16】：『明王部図像集』大正新脩大蔵経 図像第6巻所収
- 【図17】：大正新脩大蔵経 図像第2巻所収『胎藏図像』

註

1. 気賀澤保規（1988）「扶風法門寺の歴史と現状—仏舎利の来た寺」『仏教美術』179、毎日新聞社
2. 呉立民・韓金科（1998）『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』中国仏教文化出版

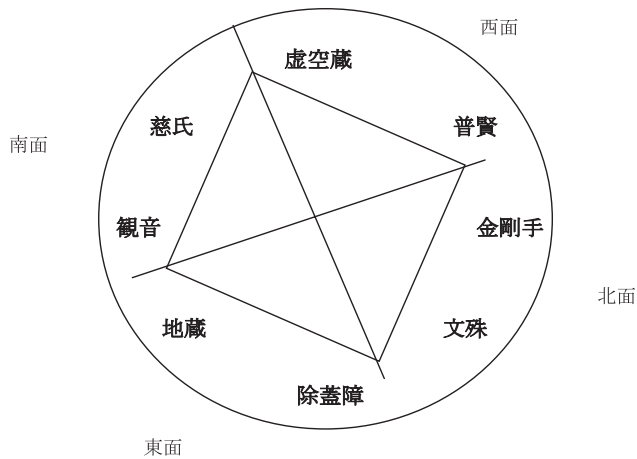
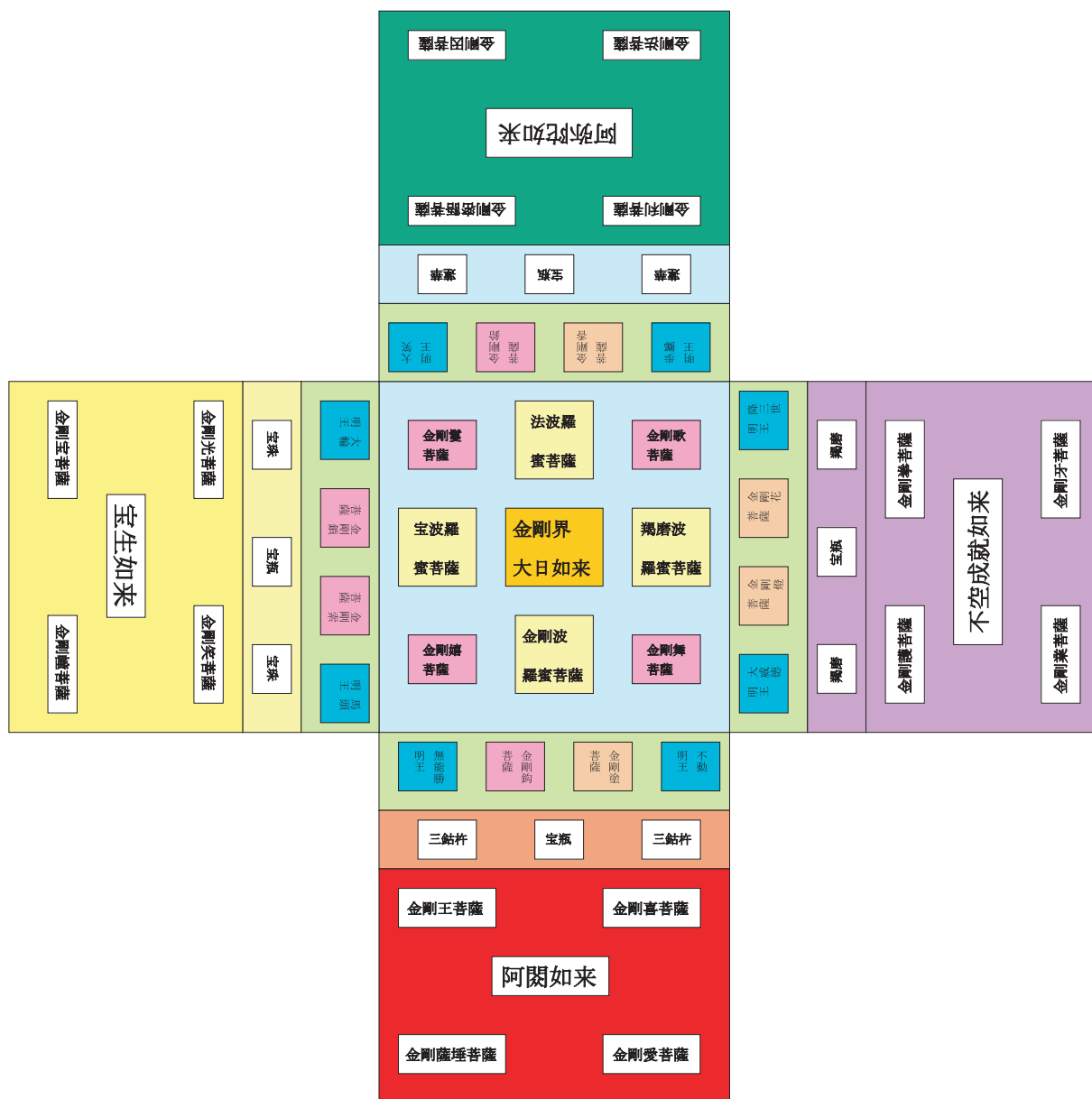
3. 頼富本宏（2000）「中国・法門寺出土の密教系遺品」（『高木I 元博士古稀記念論集 仏教文化の諸相』所収）
4. 四大明王，五大明王の成立に関する見解は，頼富本宏（1998）「五大明王の成立と展開」（『山崎泰廣教授古稀記念論集 密教と諸文化の交流』所収）にて考察が加えられている。頼富氏は八十一尊曼荼羅の四大明王は二系統以上存在したことを指摘され，一つには妙法院本・叡山本系として東南 降三世・南西 軍荼利・西北 大威徳・北東 不動，一つには石山寺系として東南 大威徳・南西 馬頭・西北 軍荼利・北東 降三世をあげられ，馬頭の入る系統が古く，不動の入る系統が新しいと指摘されている。
また，『悪趣清浄タントラ』に説く東方 甘露軍荼利・南方 降三世・西方 不動・北方 馬頭，同本のヴァジュラヴァルマンの註釈には東方 降三世・南方 甘露軍荼利・西方 大威徳・北方 馬頭の四大明王があげられることを指摘されている。
5. 『秘密集会タントラ』に属する文献資料であるが，田中公明（2000）「敦煌出土の八大明王儀軌について」（同著『敦煌の密教美術』法蔵館 所収）にて紹介された八大明王儀軌には『大妙金剛経』に説く姿とは異なる八大明王の像容が記されている。
6. 密教辞典編纂会（1931，初版）『密教大辞典 縮刷版』法蔵館。筆者は1998年の第八刷版p.1813a「八大明王」の項を参照した。
7. 頼富本宏（1974）「八大菩薩像について」（佐和隆研編『密教美術の原像』法蔵館 所収）
8. 田中公明（2004）『両界曼荼羅の誕生』春秋社のうちの「第四章 八大菩薩」p.66～p.94
9. 下泉全暁（2000）「香川・普門院蔵 五忿怒尊像について」（『密教図像』第十五号）
10. 頼富本宏（1999）「中国の密教美術」（立川武蔵・頼富本宏編『シリーズ密教3 中国密教』春秋社 所収）
11. 朴亨國（2001）「中国の変化観音について」（『シルクロード学研究Vol.11 観音菩薩像の成立と展開－変化観音を中心にインドから日本まで－』シルクロード学研究センター 第四章所収）
12. 中川千咲（1936）「長尾氏蔵五钴鈴解」（『美術研究』71），石田尚豊（1965）「恵果・空海系以前の胎蔵曼荼羅」（『東京国立博物館紀要1号』）
13. 前掲（註3）論文に同じ
14. 前傾（註9）論文に同じ

〔附記〕

本稿は，日本学術振興会特別研究員のための平成17年度科学研究費補助金による「アジア的視点から見た日本の不動明王の受容と展開」の研究成果の一部である。末筆ながらここに記して厚く御礼申し上げます。

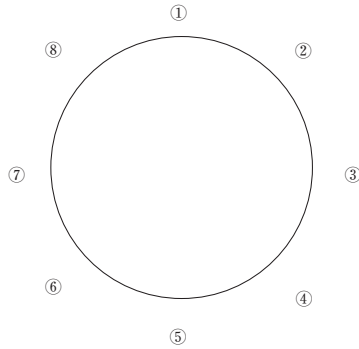
（2005年10月20日受付，2005年11月15日受理）

〔資料1〕法門寺地宮出土の真身宝函の展開図及び各尊格の配置



〔補足〕真身宝函に配された八大明王を対応する八大菩薩で考えた場合の位置関係

〔資料2〕仏眼曼荼羅や大仏頂曼荼羅における八大明王の配置



※下記の表の各尊名の上につけた番号(①～⑧)は右図の円環状配列に対応している。

作品名・所蔵	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	備考欄
仏眼曼荼羅 京都・神光院蔵 鎌倉時代(13世紀)	大輪明王 1.2.2 法輪、独鈷杵	馬頭明王 1.2.2 金剛棒、水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、斯刻印	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳	大威德明王 6.2.2 劍、拳	大笑明王 1.2.2 索?、戟	八大明王は総て蓮華座上に坐す。総ての明王が頭上に獅子冠を被る。
仏眼曼荼羅 東京・品川寺 鎌倉時代(13世紀)	大輪明王 1.2.2 法輪、金剛棒	馬頭明王 3.2.2 蓮華、水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、斯刻印	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	大威德明王 6.2.2 劍、拳腰	大笑明王 1.2.2 索、金剛棒	八大明王は総て蓮華座上に坐す。総ての明王が頭上に獅子冠を被る。
種子曼荼羅のうちの 仏眼曼荼羅図(白描) 滋賀・石山寺	大輪明王	馬頭明王	無能勝明王	不動明王	歩擲明王	降三世明王	大威德明王	大笑明王	
仏眼等図像のうちの 仏眼曼荼羅図(白描) 京都・醍醐寺	馬頭明王 3.6.2 印 蓮華、法輪 金剛棒、索	無能勝明王 3.4.2 与願手、斯刻印 三鈷杵、戟	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 3.8.2 印 法輪、三鈷杵 弓、笏 与願手、金剛棒	大威德明王 6.6.6 印 三鈷杵、法輪 金剛棒、竜索	大笑明王 1.6.2 印 三鈷杵、索 金剛棒、水瓶	大輪明王 1.6.2 法輪、三鈷杵 頭上で両手組む 竜索、独鈷杵	大輪明王と不動明王は岩座。降三世明王は台座を描かず立像、大威德明王は踏割蓮華座。その他の明王は蓮華座。
曼荼羅集のうちの 仏眼曼荼羅図(白描) 静岡・MOA美術館蔵	大輪明王 1.2.2 法輪、独鈷杵	馬頭明王 1.2.2 蓮華、水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、斯刻印	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	大威德明王 6.2.2 劍、拳腰	大輪明王 1.2.2 索、金剛棒	総て蓮華座に坐す。獅子冠はない。
曼荼羅集のうちの 仏眼曼荼羅図(白描) 静岡・MOA美術館蔵	大輪明王 1.2.2 法輪、独鈷杵	馬頭明王 1.2.2 蓮華?、水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、斯刻印	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	大威德明王 6.2.2 劍、拳腰	大笑明王 1.2.2 索、金剛棒	総て蓮華座に坐す。頭上に獅子冠を被る。
十巻抄のうちの 仏眼曼荼羅図(白描、彩色) 静岡・MOA美術館蔵	大輪明王 1.2.2 法輪、独鈷杵	馬頭明王 3.2.2 蓮華、水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、斯刻印	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	大威德明王 6.2.2 劍、拳腰	大笑明王 1.2.2 索、金剛棒	総て蓮華座に坐す。不動明王と歩擲明王は宝冠を被る。円通寺本はほ同様の内容
十巻抄のうちの 仏眼曼荼羅図(白描、彩色) 滋賀・石山寺蔵	大輪明王 1.2.2 法輪、拳腰?	馬頭明王 3.2.2 蓮華、水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	大威德明王 6.2.2 劍、拳胸前	大笑明王 1.2.2 索、宝幢?	総て蓮華座に坐す。MOA本、円通寺本と異なり、不動明王は宝冠を被らない。
別尊雑記のうちの 仏眼曼荼羅図(白描) 京都・仁和寺蔵	大輪明王 1.2.2 法輪、独鈷杵	馬頭明王 3.2.2 蓮華、水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、斯刻印	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	大威德明王 6.2.2 劍、拳腰	大笑明王 1.2.2 索、宝幢?	総て蓮華座に坐す。馬頭明王、不動明王、歩擲明王が宝冠を被る。
曼荼羅集 (大正蔵:参考図 像No.1、白描)	大輪明王 1.2.2 法輪、独鈷杵	馬頭明王 1.2.2 拳のみ?、 水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、斯刻印	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	大威德明王 6.2.2 劍、拳腰	大笑明王 1.2.2 索、金剛棒	総て蓮華座に坐す。総ての明王が頭上に獅子冠を被る
曼荼羅集 (大正蔵:参考図 像No.2、白描)	大輪明王 1.2.2 法輪、独鈷杵	馬頭明王 1.2.2 拳のみ?、 水瓶	無能勝明王 1.2.2 三鈷杵、斯刻印	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 1.2.2 三鈷杵、拳腰	大威德明王 6.2.2 劍、拳腰	大笑明王 1.2.2 索、金剛棒	総て蓮華座に坐す。
紙本墨画理趣経十八 会曼荼羅(十八会曼 荼羅図像) 京都・醍 醐寺蔵 所収の仏眼曼荼羅 (白描)	馬頭明王 1.6.2 印 拳、法輪? 金剛棒、水瓶	無能勝明王 3.4.2 斯刻印、 与願手 戟、金剛杵	不動明王 1.2.2 劍、索	歩擲明王 1.2.2 傘蓋、三鈷杵	降三世明王 3.8.2 印 法輪、三鈷杵 弓、笏 与願手、金剛棒	大威德明王 6.6.6 印 三鈷杵、法輪 金剛棒、竜索	大笑明王 16.2 印 第二手を両方 あげるが持物 は不詳 水瓶、金剛棒	大輪明王 16.2 法輪、三鈷杵? 頭上で両手組む 竜索、独鈷杵?	不動明王と大輪明王が岩座(瑟瑟座)、降三世明王と大威德明王が踏み割り蓮華座、その他の明王は蓮華座。不動明王、降三世明王、大威德明王はみな空海請来の図像により表される。

※醍醐寺蔵の仏眼曼荼羅図において①にあたる尊格が大輪明王から馬頭明王につづれ、降三世明王や大威德明王では仁王経五方諸尊図の図像に変わっている。
※表中の1.2.2などは面数、臂数、足数をそれぞれ記したものである。

付: 大仏頂曼荼羅の場合の八大明王の配置図

作品名・所蔵	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	備考欄
種子曼荼羅集のうちの 大仏頂曼荼羅図 滋賀・石山寺蔵	大笑明王	歩擲明王	降三世明王	大威德明王 (六足)	不動明王	無能勝明王	馬頭明王	大輪明王	
種子曼荼羅集のうちの 大仏頂曼荼羅図 京都・仁和寺蔵	大笑明王	歩擲明王	降三世明王	大威德明王 (六足)	不動明王	無能勝明王	馬頭明王	大輪明王	



【図版1】 アメリカ・フィールド博物館所蔵
不動明王坐像



【図版2】『曼荼羅集』所収の尊勝曼荼羅図



【図版3】『別尊雜記』所収の阿弥陀八大菩薩曼荼羅図



【図版4】 敦煌莫高窟第14窟
千手千鉢文殊曼荼羅図中の明王像



【図版5】『胎藏旧図様』所収の降三世明王



【図版6】普賢延命曼荼羅图中的降三世明王



【図版7】『別尊雜記』所収：五菩薩五忿怒像中の降三世明王



【図版8】『五部心観』所収の金剛薩c



【図版9】法門寺捧真身菩薩台座中の無能勝明王像



【図版10】西安碑林博物館所蔵の馬頭明王像



【図版11】フランス・ギメ美術館所蔵
千手千眼観音曼荼羅図中の馬頭明王



【図版12】『諸観音図像』所収の馬頭観音



【図版13】『別尊雜記』所収：五菩薩五忿怒像中の大威徳明王



【図版14】『胎藏旧図様』所収の六臂尊及五侍童子



【図版15】『御室版胎藏曼荼羅』中の大威徳明王



【図版16】『明王部図像集』所収の大威徳明王



【図版17】『胎藏図像』所収の六面尊



【図版18】法門寺捧真身菩薩台座中の烏枢沙摩明王像



【図版19】法門寺捧真身菩薩台座中の大威徳明王像



【図版20】『胎藏旧図様』所収の金剛童子